

初年次教育におけるアクティブラーニング実践報告

— グローバルキャンパスでの試行 —

杉本 あゆみ

The Practical Report of Active Learning on the First Year Education of Students — Trial on Global Campus —

Ayumi SUGIMOTO

Abstract

This is a practical report on the first year education of students the author conducted. By conducting active learning during freshmen education, this report evaluated, verified, and validated that all attendees acquired the necessary abilities by conducting review tests, student surveys, and student interviews. The characteristics of these classes include a global campus in which Japanese and foreign exchange students can attend classes together, a cooperative learning style being conducted in which different cultures interact, and team-teaching being conducted.

Key-words

キャリア教育、初年次教育、能動的学修（アクティブラーニング）、異文化交流、グローバルキャンパス、チームティーチング

1. はじめに

1.1 アクティブラーニングについて

学習者が自ら授業に参加するという、学習者に視点を置いた教育に関心が高まってきた結果、多くの高等教育機関においてアクティブラーニングを取り入れた授業が実施されるようになってきた。アクティブラーニングとは「能動的学修」と訳され、それまでの高等教育機関における伝統的な講義形式の授業とは異なる。2012年（平成24年）8月に中央教育審議会が示すアクティブラーニングの定義とは次のようなものである。

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・

ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」（新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）『用語集』より引用）

上記によれば、アクティブラーニングとは、「教員による一方向的な講義形式」以外のものを指すことになるのだが、他に、Charles C. Bonwell (1991) によれば、アクティブラーニングとは学生たちが行っている何かに関する思考と行為といった、それぞれの活動のなかで学生を巻き込んでいるすべてとしている。ゆえにアクティブラーニング（能動的学修）をしている状態とは、教員がテキストの内容を説明し学生がそれを聞く、教員が板書し学生がそれをノートに写すという学習活動以外のすべての活動をしている状態のことであると理解できる。

従来の知識詰め込み型中心の教育から、学びの意味を

学生に理解させた上で、教員と学生が共に知性を高めていく学生主体型の学士課程教育に変換すべきであることに疑いはない。アクティブラーニングは高等教育機関における従来の講義形式の授業方法から抜け出すための良い教育方法であることは確かであり、高等教育機関の授業にアクティブラーニングの手法を取り入れることは必須の流れであると考えられる。

1.2 初年次教育について

さらに、社会人基礎力の育成として、文部科学省はキャリア教育の一環としての初年次教育を推奨している。2008年（平成20年）12月に中央教育審議会は、初年次教育（社会人基礎力の育成プログラム）を、「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的諸経験を成功させるべく、主に新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」と定義している。（中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）2008年（平成20年）12月より引用）

また、初年次教育の内容として、

- ・スタディスキル（大学で学ぶために必要なスキル＝リーディング、レポートライティング、批判的思考、調査、プレゼンテーション、ノートのとり方、レポートの書き方など）
- ・専門教育への導入（専門教育への橋渡しとなる基礎的知識・技能の教育）
- ・学び全般への導入教育（教養ゼミ、総合演習、自己の探求と学問のすすめ）
- ・チューデントスキル（学生生活における時間管理や学習習慣の確立）
- ・オリエンテーションやガイダンス（履修の仕方、施設の利用方法）
- ・情報リテラシー（コンピュータリテラシー、情報処理、ネット利用の方法とリスク）
- ・自校教育（建学の精神、教育目標）
- ・キャリアデザイン

（川島啓二『大学と学生』2008年（平成20年）5月号より引用）などが挙げられる。さらに、初年次教育で重視さ

れていることとして、

- ・学生生活における時間管理や学習習慣の確立
- ・受講態度や礼儀・マナー
- ・チームワークを通じての協調性
- ・社会の構成員としての自覚・責任感（社会的市民性）
- ・学生の自信や自己肯定感

（杉谷祐美子「大学教育学会第30回大会資料」2008年（平成20年）より引用）などが挙げられている。

筆者が滋賀文教短期大学（以下、当短大）において実践した「基礎力プログラムⅠ」のカリキュラムには、報告書やレポートを書いたりする文章力や、マナー、チームワークを通じての協調性、社会の構成員としての自覚・責任感など、社会人になるにあたって必要不可欠なスキルを身につけられる内容が満遍なく網羅されているため、科目内容に関しては十分に役割を果たしているということができ、筆者がメイン担当した授業においては、上記にある「スタディスキルを身につける」「学生生活における時間管理や学習習慣の確立」「チームワークを通じて協調性を身につける」が該当する。

1.3 チームティーチングについて

チームティーチングとは、複数の教員が協力しながら指導計画を立て、それぞれの役割を分担し、指導していく方法のことである。この方法はチームの教員一人ひとりの特性を最大限に活かした体制であり、それぞれの教員が分担する役割を果たすことで成立する指導形態といえる。

チームティーチングのメリットとしては、多角的に学生の実態が把握できること、一人ひとりの教員の専門性や特性を活かし創造的な授業を実施できること、多様な学習グループを編成することが可能となり、さらに学生一人ひとりの実態に応じた細やかな指導が可能となること、などが挙げられ、デメリットとしては、教員が依存的になる危険性があること、サブとなる教員の学生への働きかけが弱まる可能性があるということなどが挙げられる。

本稿の授業においては3名の教員が、以下のとおり15回の授業を分担した。

教員Aメイン担当授業

- 第1回 大学について知る
- 第12回 プレゼンテーションの企画を考える①
- 第13回 プレゼンテーションの企画を考える②
- 第14回 プレゼンテーション資料を作る
- 第15回 プレゼンテーション実践

教員Bメイン担当授業

- 第6回 文学作品を読んでまとめる
- 第7回 批評文を読んでまとめる
- 第8回 情報の集め方を学ぶ
- 第9回 レジュメの作り方
- 第10回 レポートについて学ぶ
- 第11回 レポートを書いてみる

筆者メイン担当授業

- 第2回 学生生活をデザインする
- 第3回 ノートの取り方
- 第4回 メールの書き方とマナー
- 第5回 報告文の書き方

筆者サブ担当授業

- 第9回 レジュメの作り方
- 第11回 レポートを書いてみる（レポート発表）
- 第14回 プレゼンテーション資料を作る
- 第15回 プレゼンテーション実践

基本的にはメイン担当が中心となって授業を実施するが、授業内容を鑑み、必要に応じてサブ担当を取り入れた。

1.4 グローバルキャンパスについて

ここでグローバルキャンパスについて述べておきたい。キャンパスの国際化のスピードは速く、現在では「グローバルキャンパス」という概念にまで発展している段階を迎えている。

倉林（2013）は、「キャンパスの国際化」という表現については、大学における時間的変容を示したもののだが、

「グローバルキャンパス」という表現は、大学の構造を基点としてそれを空間的に拡大した拡がりを持つ概念としている。また倉林（2013）は、「グローバルキャンパス」は学生一人ひとりを繋ぐ「場」であり、その連動を学内外へ面的に押し広げていく拠点としての「グローバルキャンパス」の重要性を指摘している。

本稿における「基礎力プログラムⅠ」は日本人学生と留学生が同じ空間を共有し、協働学修を実践するものであるため、グローバルキャンパスの側面も持つ。教員はグローバルキャンパスへの対応力を身につけなければならないが、担当教員にはグローバルキャンパスや異文化交流を意識した授業を実践する必要性、また、日本人学生と比べて日本語能力に差がある留学生における配慮が求められる。以上を鑑み、本科目においては、メイン担当教員のみでは留学生のフォローが難しいと思われる、第9回授業「レジュメの作り方」、第11回授業「レポートを書いてみる」、第14回授業「プレゼンテーション資料を作る」、第15回授業「プレゼンテーション実践」において筆者がサブ担当を務め、留学生のフォローに当たった。

2. 本研究の目的・意義

2.1 目的

本稿では、第一に、当短大におけるアクティブラーニングを用いた初年次教育のカリキュラム（プログラム）を設計、運用して、キャリア教育の一環としての授業効果を検証すること、第二に、初年次教育における確認テスト、アンケート、インタビュー、留学生日本語能力テストなどを設計、運用して、従来は主観的な面から行われることの多かった効果測定を客観的な面からも実施し、大学全入時代の到来により問われるようになってきた、大学における「教育の質の保証」を検証すること、言い換えれば、当短大の初年次教育プログラムが有効に作用しているか検証することを目的とする。

2.2 意義

先述した「教育の質の保証」においてFD（Faculty Development ファカルティ・ディベロップメント）大学教員が授業の内容や方法を改善し向上させるため

の組織的な取り組み)の一環であるIR (Institutional Research) インスティテューショナル・リサーチ 高等機関レベルでの計画立案や意思決定に有効なデータの分析および提供を行う組織的活動)の観点、つまり学内の様々な情報を収集・分析し、数値化したものを教育、学生支援等に活用するという観点からも、本稿で実践する初年次教育におけるアクティブラーニングの効果を数値で表わすということは有効であり、そのことで「教育の質の保証」を実証できるところに本稿の意義を示したい。

3. 研究概要及び調査方法

本研究においては、以下の手続きで研究を行った。

まず、筆者がメイン担当した授業である第3回授業「ノートの取り方」、第4回授業「メールの書き方とマナー」、第5回授業「報告文の書き方」において、授業に入る前に事前調査として、学生全員が会社で働いた経験(アルバイト含む)が皆無であること、インターンシップ経験が無いこと、また、学生全員がパソコンのメールアドレスを取得しておらず、したがって公的なメールや報告書を作成した経験が全く無いということ、さらには高等学校時代までにパソコン関連の授業がなく、パソコンに全く触れたことがない学生が8名(学生総数21名)いることを確認した。また、留学生には授業中、母国語は使わずに日本語で話すよう指導した。

次に、グループワークによるアクティブラーニング授業を実践し、授業において「ノートの取り方」「メールの書き方とマナー」「報告文の書き方」の能力が学生に身に付いたかどうかを確認するために授業の終了時に確認テストを実施した。

さらに、15回の授業終了時には、当短大がFD活動の一環として全学的に実施している科目別授業評価アンケート(資料1)、科目別授業評価記述式アンケート(資料2)や、日本人学生、留学生の率直な意見を聞くインタビュー(資料3)を実施した。

また、授業前後の留学生の日本語能力を比較するためにN4-N5レベルの日本語能力テストを授業の事前、事後に実施した。

そして、本科目の効果を多角的に測定するために5つ

の調査分析を行った。調査1として教員による客観的な効果測定である確認テストの結果について分析した。調査2として科目別授業評価アンケート調査結果について分析した。調査3として科目別授業評価記述式アンケート調査結果について分析した。調査4として日本人学生、留学生の率直な意見であるインタビューについて分析した。調査5として授業前後に実施した留学生による日本語能力テストの結果について分析した。なお、調査2、3、4は、いずれも先述した「2.1目的」にある第一目的を検証するために実施し、調査1、5は、「2.1目的」にある第一目的に加えて、第二目的にある、従来は主観的な面から実施されることの多かった効果測定を客観的な面からも実施し、「教育の質の保証」を検証するために行うものである(表1)。

表1：調査概要表

	調査名称	調査内容	
調査1	確認テスト	授業目標到達度	客観的評価
調査2	科目別授業評価アンケート(資料1)	授業満足度	主観的評価
調査3	科目別授業評価記述式アンケート(資料2)	到達目標達成度、授業を受けて感じたこと	主観的評価
調査4	日本人学生、留学生インタビュー(資料3)	授業内容に関する意見	主観的評価
調査5	留学生日本語能力テスト	日本語能力の上昇値	客観的評価

資料1：科目別授業評価アンケート

質問事項

1. 授業内容をよく理解できましたか。
2. 授業内容は関心が持てましたか。
3. この授業はシラバスに沿った内容でしたか。
4. 教員が授業中に話す言葉は聞き取りやすかったですか。
5. 板書は読みやすかったですか。
6. 授業は学生の理解に合わせた適切な速度でしたか。
7. 授業中の教員に活気や熱意を感じましたか。
8. 教科書、参考書（プリント）の使用は適切でしたか。
9. あなたは、私語をひかえ学習に集中していたと思いますか。
10. あなたはこの授業内容に満足していますか。
11. 授業に対して、1週間あたりどのくらい勉強していますか。

(⑤週3時間以上、④週1時間以上～3時間未満、
③週30分以上～1時間未満、②30分未満、①していない)

上記質問について、評価尺度は大小、優劣の一定の序列を示すリッカートスケール法の5段階評価（5非常にそう思う、4そう思う、3どちらでもない、2そう思わない、1全くそう思わない）を用いて回答。

資料2：科目別授業評価記述式アンケート

「基礎力プログラムⅠ」到達目標

- ・建学の精神や国文学科の教育目標を理解する。
- ・大学での学習に必要な読み書き能力を身につける。
- ・グループワークで自らの役割を見つけ、担うことができる。
- ・人前で簡単なプレゼンテーションができるようになる。

以上の到達目標がどのくらい達成できていますか。

5段階評価（5非常にそう思う、4そう思う、3どちらでもない、2そう思わない、1全くそう思わない）を用いて回答。

あなたが、この授業を受けて感じたことを書いて下さい。

- ・授業を受けてよかったと思う点
- ・改善した方がよいと思う点

資料3：日本人学生、留学生インタビュー内容

インタビュー項目

- ・大学生活の目標がはっきりしてきたか
- ・自ら勉強しているか、以前より学習時間は増えたか
- ・大学の授業の受け方が理解できたか
- ・ノートが取れるようになったか
- ・ポイントを掴んで自分の言葉でまとめられるようになったか
- ・メールの書き方とマナーが理解できたか
- ・公的なメールの書き方について理解しているか
- ・実際にメールを書けるようになったか
- ・報告文が書けるようになったか
- ・公的文書の書き方を理解しているか
- ・ポイントをまとめて箇条書きをすることができるようになったか
- ・異文化交流はできているか
- ・全体的な授業の感想

留学生のみのインタビュー項目

- ・日本語能力が向上したと思うか
- ・日本人学生とコミュニケーションが取れるようになったか

上記質問について、日本人学生、留学生の率直な意見を聞いた。

4. 授業について

4.1 概要

初年次教育科目「基礎力プログラムⅠ」の概要は以下のとおりである。

科目名：基礎力プログラムⅠ

授業時間数：90分授業×15回

授業の到達目標：

- ・建学の精神や教育目標を理解する。
- ・大学での学習に必要な読み書き能力を身につける。
- ・グループワークで自らの役割を見つけ、担うことができる。
- ・人前で簡単なプレゼンテーションができるようになる。

上記のうち、本稿で述べる筆者がメイン担当した授業

である「ノートの取り方」「メールの書き方とマナー」「報告文の書き方」における授業の到達目標としては、「大学での学習に必要な読み書き能力を身につける」「グループワークで自らの役割を見つけ、担うことができる」が当てはまる。

また、授業の特徴として、日本人学生と留学生が一緒に授業を受けるというグローバルキャンパスであること、チームティーチングを実践していること、が挙げられる。

4.2 対象学生

日本人学生18名（男子3名、女子15名）、留学生（女子3名）、合計21名のクラスで実施した（表2）。

4.3 単位・成績評価

本稿の該当科目である基礎力プログラムⅠの成績評価は、授業の取り組み50パーセント、提出物30パーセント、発表20パーセントにより評価され、1単位が与えられる。これらを3名の担当教員で3分割し、それぞれに評価した得点を合算し、総合得点をもとにS（90点以上）、A（80点～89点）、B（70点～79点）、C（60点～69点）、D（59点以下）と評価した。該当科目はチームティーチングであるがゆえに、成績評価の際、担当教員による綿密な打ち合わせが必要であった。

4.4 授業の内容

15回の授業内容は表3を参照されたい。

ここでは、筆者がメイン担当した授業である「大学生生活をデザインする」「ノートの取り方」「メールの書き方とマナー」「報告文の書き方」の詳細を述べる。

教員が授業テーマのポイントの説明を行った後に、テーマに沿った課題を与え、学生はグループで意見交換をしながら課題を進める。その際、留学生のみで固まらないように、日本人学生と留学生の異文化交流が図れるよう、必要に応じて教員が促す必要がある。

学生が課題をある程度終えた後、教員が課題について解説し、授業の最後に授業目標到達度を測るための確認テストを行う。

4.5 確認テストについて

確認テストの内容、採点基準を以下のとおりとし、それぞれ100点満点とした。

「ノートの取り方」

確認テストの内容

・当日の授業内容をノート1ページ程度にまとめる

採点基準

- ・5W3H（WHEN・WHERE・WHO・WHAT・WHY・HOW・HOW MANY・HOW MUCH）に沿った文章で書かれているか
- ・自分の言葉でまとめられているか
- ・工夫（色分けなど）がなされているか

「メールの書き方とマナー」

確認テストの内容

・具体的な事例を与え、内容をまとめ教員宛にメールを送って報告する

採点基準

- ・5W3Hに沿った文章で書かれているか
- ・宛先には敬称をつけているか
- ・TO、CC、BCCの使い分けを理解しているか
- ・メール用の署名が作成されているか
- ・件名（タイトル）は簡潔に分かりやすく書かれているか
- ・ビジネスメールの定型フォーマットに沿って書かれているか
- ・1メールは1用件で書かれているか
- ・引用は正しく行われているか
- ・あいまいな表現は避けているか

「報告文の書き方」

確認テストの内容

・具体的な事例を与え、内容をまとめ教員宛に報告文を作成し提出する

採点基準

- ・5W3Hに沿った文章で書かれているか
- ・一般的な報告書の構成に沿って書かれているか
- ・だらだらと長い文章でなく、わかりやすい短文、箇条

書きで書かれているか

- ・文章のまとめりごとに、適度な余白があり見やすくなっているか
- ・文の長さや、文頭がきちんとそろっているなど、構成・レイアウトが整っているか
- ・相手に理解して欲しい点が「見出し」になっていて、一目で分かるようになっているか

4.6 留学生日本語能力テストについて

授業実施前後で留学生の日本語能力の伸びが見られるかどうかを確認するために、15回の授業を実施する前（事前）と15回の授業を実施した後（事後）に、独立行政法人国際交流基金と公益財団法人日本国際教育支援協会が共催する日本語能力試験（JLPT）N4、N5の問題を参考にして作成したN4-N5レベルの日本語能力テスト（文字、語彙、文法、読解、聴解）を行った。

表2：学生内訳

国籍	性別	人数	日本語レベル
日本人学生	男性	3名	ネイティブ
日本人学生	女性	15名	ネイティブ
タイ人留学生	女性	3名	初級（N4-N5）

表3：授業の実施内容

回数	授業内容	目標	学生の行動
1	大学について知る	高等学校との違いを理解する	学生便覧を確認し、本稿について学ぶ
2	学生生活をデザインする	2年間の計画を立てることができる	今後2年間の大学生活の具体的な目標、計画を立てる
3	ノートの取り方	授業の内容をまとめてノートに書くことができる	ポイントを掴んで自分の事が出まとめる（グループワーク）
4	メールの書き方とマナー	公的なメールを書くことができる	メールアドレスの取得、実際にメールを書く（グループワーク）
5	報告文の書き方	公的文書を書くことができる	ポイントをまとめて箇条書きをする練習（グループワーク）
6	文学作品を読んでまとめる	芥川龍之介について理解を深める	作品を読み、作品内容をまとめて書く
7	批評文を読んでまとめる	『トロッコ』についての批評文を読み解き内容をまとめることができる	批評文を読み、内容をまとめて書く
8	情報の集め方を学ぶ	図書館情報学を理解する	図書館長からの説明を聞く
9	レジュメの作り方	ワードを使って文章を書けるようになる	ワードの使い方を学ぶ（グループワーク）

10	レポートについて学ぶ	日本語表現について理解する	情報を集めてレポートを書く(グループワーク)
11	レポートを書いてみる	文章力をつける	書いたレポート内容を発表する(グループワーク)
12	プレゼンテーションの企画を考える①	協働学習	学園祭にどのような模擬店をするか話し合う(グループワーク)
13	プレゼンテーションの企画を考える②	協働学習	実施する模擬店内容を話し合い、まとめる(グループワーク)
14	プレゼンテーション資料を作る	パワーポイントを使って資料を作れるようになる	パワーポイントの使い方を学ぶ(グループワーク)
15	プレゼンテーション実践	発表力をつける	実施する模擬店内容を発表する(グループワーク)

5. 結果

5.1 確認テストの結果・分析

以下が確認テストの結果である。

表4：確認テスト結果

授業内容	平均(点)	標準偏差
ノートの取り方	92.3	6.8
メールの書き方とマナー	96.1	3.2
報告文の書き方	94.6	6.2

分析：上記結果より、平均点は9割以上で、点数のばらつきも少ないことから、ほぼ全員の学生が授業目標に到達していると考えられる。

「ノートの取り方」に関しては、ほぼ全員の学生が授

業内容を、わかりやすい言葉をつかって5W3Hに沿った文で書いていた。また、色分けなどの工夫もなされており、特に問題はなかった。

「メールの書き方とマナー」に関しても、ほぼ全員の学生がビジネスメールの定型フォーマットに沿って課題をまとめており、あいまいな表現を避けて、わかりやすく簡潔に表現されていた。宛先の敬称や簡潔な件名についても全員が理解できていた。ただし、メール用の署名に関しては個性的なものも散見されたが特に問題視すべきものはなかった。

「報告文の書き方」に関しても、前述した項目と同様に、ほぼ全員の学生が課題内容をクリアしており、わかりやすい「見出し」から始まる一般的な報告書の構成に沿って書かれていた。また、内容も簡潔な短文で箇条書きにまとめられていた。

5.2 アンケートの結果・分析

以下がそれぞれのアンケート結果であり、それらを分析していく。

科目別授業評価アンケート結果

1. 授業内容をよく理解できましたか。

非常にそう思う	6名	28.6%
そう思う	14名	66.7%
どちらでもない	1名	4.8%
そう思わない	0名	0%
全くそう思わない	0名	0%

2. 授業内容は関心が持てましたか。

非常にそう思う	8名	38.1%
そう思う	11名	52.4%
どちらでもない	2名	9.5%
そう思わない	0名	0%
全くそう思わない	0名	0%

3. この授業はシラバスに沿った内容でしたか。

非常にそう思う	12名	57.1%
そう思う	8名	38.1%

どちらでもない 1名 4.8%
 そう思わない 0名 0%
 全くそう思わない 0名 0%

4. 教員が授業中に話す言葉は聞き取りやすかったですか。

非常にそう思う 7名 33.3%
 そう思う 11名 52.4%
 どちらでもない 3名 14.3%
 そう思わない 0名 0%
 全くそう思わない 0名 0%

5. 板書は読みやすかったですか。

非常にそう思う 9名 42.9%
 そう思う 7名 33.3%
 どちらでもない 5名 23.8%
 そう思わない 0名 0%
 全くそう思わない 0名 0%

6. 授業は学生の理解に合わせた適切な速度でしたか。

非常にそう思う 9名 42.9%
 そう思う 10名 47.6%
 どちらでもない 2名 9.5%
 そう思わない 0名 0%
 全くそう思わない 0名 0%

7. 授業中の教員に活気や熱意を感じましたか。

非常にそう思う 8名 38.1%
 そう思う 11名 52.4%
 どちらでもない 2名 9.5%
 そう思わない 0名 0%
 全くそう思わない 0名 0%

8. 教科書、参考書（プリント）の使用は適切でしたか。

非常にそう思う 10名 47.6%
 そう思う 7名 33.3%
 どちらでもない 4名 19.0%
 そう思わない 0名 0%
 全くそう思わない 0名 0%

9. あなたは、私語をひかえ学習に集中していたと思いますか。

非常にそう思う 10名 47.6%
 そう思う 8名 38.1%
 どちらでもない 1名 4.8%
 そう思わない 1名 4.8%
 全くそう思わない 1名 4.8%

10. あなたはこの授業内容に満足していますか。

非常にそう思う 8名 38.1%
 そう思う 8名 38.1%
 どちらでもない 5名 23.8%
 そう思わない 0名 0%
 全くそう思わない 0名 0%

11. 授業に対して、1週間あたりどのくらい勉強していますか。

週3時間以上 0名 0%
 週1時間以上～3時間未満 3名 14.3%
 週30分以上～1時間未満 4名 19.0%
 30分未満 9名 42.9%
 していない 5名 23.8%

分析：まず、教員の授業技量に関連する質問事項3-8について分析し、その後に授業内容に関する質問事項1-2、10について述べていく。尚、質問事項11の学習時間については、日本人学生、留学生インタビューの結果と合わせて、後述する。

教員の授業技量に関連する質問項目である、「3.この授業はシラバスに沿った内容でしたか」「4.教員が授業中に話す言葉は聞き取りやすかったですか」「5.板書は読みやすかったですか」「6.授業は学生の理解に合わせた適切な速度でしたか」「7.授業中の教員に活気や熱意を感じましたか」「8.教科書、参考書（プリント）の使用は適切でしたか」のうち、「3.この授業はシラバスに沿った内容でしたか」「6.授業は学生の理解に合わせた適切な速度でしたか」「7.授業中の教員に活気や熱意を感じましたか」については、9割以上の学生が「非常にそう思う」「そう思う」

と回答しており、多くの学生の満足度の高さがうかがえる。

「4.教員が授業中に話す言葉は聞き取りやすかったですか」については、8割以上の学生が「非常にそう思う」「そう思う」と回答しているものの、「どちらでもない」という回答が14.3%であった。これはこの科目の特徴である日本人学生と留学生と一緒に授業を受けるということに関連しているのではないかとと思われる。この科目を受講している留学生の日本語能力は初級（N4-N5）レベルであるので日本人学生との日本語能力差は大きく、担当教員はこの点に留意して留学生の授業満足度を高めるべく工夫が必要とされる。

「5.板書は読みやすかったですか」「8.教科書、参考書（プリント）の使用は適切でしたか」については、2割程度の学生が「どちらでもない」と回答しているが、これはこの科目のグループワークによる実践授業という性質上、板書を読んだり、教科書や配布プリントを使用する頻度が低いためであると考えられる。

次に、授業内容に関する質問項目についての学生の回答を分析していく。

授業内容の理解に関する質問項目である「1.授業内容をよく理解できましたか」については、「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生は95.2%であり、ほとんどの学生が「基礎力プログラムⅠ」の授業内容に対して高い理解度を示していた。これは、授業の到達目標が常に明確に示され、学生もこれを十分に理解し、教員も学生の理解度を確認しながら授業を進めていたことで得られた結果であると考えることができる。

授業内容の関心に関する質問項目である「2.授業内容は関心が持てましたか」については、「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生は90.5%であり、こちらの質問項目においても「1.授業内容をよく理解できましたか」と同様に、9割以上の学生が「基礎力プログラムⅠ」の授業内容に対して高い関心を示していた。こちらにおいても、授業の到達目標が常に明確に示され、さらに、なぜこれらの到達目標を身に付けなければいけないのかという理由、つまりこれらの到達目標は社会人になるためには必須のものであるということを学生が十分に理解

し、教員も学生の授業における関心度を確認しながら授業を進めていたことで得られた結果であると考えられることができる。

最後に、「基礎力プログラムⅠ」の授業全体の満足度の指標となる項目「10.あなたはこの授業内容に満足していますか」に対して、この質問においては76.2%の学生が「非常にそう思う」「そう思う」と答えており、前述の「1.授業内容をよく理解できましたか」や「2.授業内容は関心が持てましたか」の質問結果に比べると、それほど本科目が学生に高い満足度を与えていなかったということがわかる。この結果については、後述する科目別授業評価記述式アンケートの「改善した方がよいと思う点」にある、チームティーチングによる教員間の引継ぎの手際の悪さや、発表資料を作る時間が十分に設けられなかったことが原因であると考えられる。

科目別授業評価記述式アンケート結果

到達目標に達成できたか

非常にそう思う	6名	28.6%
そう思う	12名	57.1%
どちらでもない	3名	14.3%
そう思わない	0名	0%
全くそう思わない	0名	0%
無回答	0名	0%

授業を受けてよかったと思う点

- ・大学生活について理解できた。
- ・作文が書けるようになった。
- ・論文や作文を書く能力が身に付いた。
- ・パワーポイントができるようになった。
- ・社会に出て恥ずかしくない知識を学べた。
- ・人前で話せるようになった。
- ・コミュニケーション力がついた。
- ・グループで考え働くことの大切さを学んだ。
- ・グループワークで自分の悪い点が分かった。
- ・チーム活動が社会で必要だということを学べた。

改善した方がよいと思う点

- ・教員間の引継ぎが上手くいっていないと感じることがあった。

・後半の授業は時間が足りなかった。

分析：このアンケート結果から、授業の到達目標に自分自身が達していると感じている学生が全体の85.7%であり、学生自身による自己評価は概ね高いことが明らかとなった。この結果は、上記の「授業を受けてよかったと思う点」にあるように、明確に示された授業の到達目標をもとに学習する上で、今まで出来なかったこと（作文が書けるようになった、パワーポイントが使えるようになった、人前で話せるようになった、コミュニケーション力がついた、など）が出来るようになったという達成感を学生自身が味わうことができたためと考えられる。

5.3 留学生日本語能力テストの結果・分析

以下の表は、15回の授業を実施する前（事前）と15回の授業を実施した後（事後）に行った留学生による日本語能力テスト（N4-N5レベル）の結果である。

表5：留学生テスト結果

	事前テスト（点） 100点満点	事後テスト（点） 100点満点	事後－事前（上昇値）
留学生A	46	63	+17
留学生B	40	62	+22
留学生C	30	50	+20

分析：上記の結果より、留学生の日本語力の上昇が確認される。この上昇は必ずしも「基礎力プログラムⅠ」の授業だけによるものではないが、後述する留学生インタビューで、この授業が日本語能力の向上に役立ったという意見があった。中には「自分でも自覚できる程日本語が話せるようになり自信がついた」とインタビューで述べる留学生もいた。

5.4 日本人学生、留学生インタビュー結果・分析

全15回の授業終了後に実施した日本人学生、留学生へのインタビュー結果は以下のとおりである。

・大学生活の目標がはっきりしてきたか

結果：上記の質問に関しては、9割以上の学生が「授業

を受ける前は意識していなかったが授業を受けたことによって自分の目標について真剣に考え、はっきりと意識するようになった」と答えており、授業の成果が表れているといえる。他の少数意見として、「真剣に考えたが、まだ具体的な目標が定まっていない」という、人生経験が少ないために、自己の目標を具体的にイメージすることができない学生がいた。

・自ら勉強しているか、以前より学習時間は増えたか

結果：上記の質問に関しては、ほぼ全員の学生が「入学前より自宅や学校での学習時間が増えた」と答えており、「以前よりも自主的に学習するようになった」という意見や、「確認テストをするので、これまでより真剣に授業に取り組み学習するようになった」という、確認テストの実施が学生の能動的な学習に結びついていると考えられる意見もあった。

・大学の授業の受け方が理解できたか

・ノートが取れるようになったか

・ポイントを掴んで自分の言葉でまとめられるようになったか

結果：上記の3つの質問に関しても、ほぼ全員の学生が「この授業を受けたことによって大学の授業の受け方がわかり、今まで上手くできなかったことができるようになったと思う」と答えており、学生の主観的評価は高いといえる。

・メールの書き方とマナーが理解できたか

・公的なメールの書き方について理解しているか

・実際にメールを書けるようになったか

結果：上記の質問に関しては、9割以上の学生が「メールの書き方、マナーについて理解でき、実際にメールが書けるようになった」と答えていた。他に、少数意見として「授業の課題内容については理解できたものの、課題以外の内容のメールについて応用できるかどうか不安である」というものがあった。

・報告文が書けるようになったか

- ・公的文書の書き方を理解しているか
- ・ポイントをまとめて箇条書きをすることができるようになったか

結果：上記の質問に関しても、9割以上の学生が「報告文や公的文書の書き方について理解でき、ポイントをまとめて書けるようになった」と答えていた。他に、少数意見として、上記のメールの質問における少数意見と同様に、「授業の課題内容については理解できたものの、課題以外の内容の報告文について応用できるかどうか不安である」という、自身の汎用力を不安視するものがあった。

- ・異文化交流はできているか

結果：上記の質問に関して、全員の学生が、「基礎力プログラムⅠ」ではグループワークが多く、日本人学生と留学生が話し合う機会が設けられ、異文化交流体験をすることができて有益であったという意見であった。

- ・全体的な授業の感想

結果：上記の質問に関して、ほぼ全員の学生が「授業内容は自分自身の役に立った」もしくは「授業内容はこれからの自分に役に立つと思う」と答えていた。

分析：以上のインタビューの結果より、「基礎力プログラムⅠ」における学生の主観的評価は概ね高く、授業内容は学生に有効に作用していたといえる。この結果は、学生の客観的評価である確認テストの結果とも整合しているといえる。

しかしながら、質問項目「自ら勉強しているか、以前より学習時間は増えたか」の結果は、ほぼ全員の学生が「入学前より自宅や学校での学習時間が増えた」と回答していたにもかかわらず、科目別授業評価アンケート「11. 授業に対して、1週間あたりどのくらい勉強していますか」の結果は、週3時間以上 0名 0%、週1時間以上～3時間未満 3名 14.3%、週30分以上～1時間未満 4名 19.0%、30分未満 9名 42.9%、していない 5名 23.8%と、両結果は整合していない。これは、科目別授業評価アンケートの質問文の読み違い（1週間あた

りの学習時間を、1日あたりの学習時間と勘違いした）があったのではないかと思われ、次回以降の科目別授業評価アンケートにおいては、学習時間に関して質問の仕方を変更する必要性を感じる。

留学生のみのインタビュー項目

- ・日本語能力が向上したと思うか

結果：上記の質問に関しては、留学生全員が「日本語能力が向上したと思う」と答えており、その他、「授業で日本語を話すようにしたことがよかった」「日本人学生に日本語を教えてもらえたことにより日本語能力が向上した」「以前は日本語を話すことに自信がなかったが今では自信がついた」という意見もあった。

- ・日本人学生とコミュニケーションが取れるようになったか

結果：上記の質問に関しては、日本人学生と同様に、留学生全員が「基礎力プログラムⅠ」ではグループワークが多く、日本人学生と留学生が話し合う機会が設けられ、異文化交流できたことは良い経験であったと答えていた。

分析：以上の留学生インタビュー結果より、「基礎力プログラムⅠ」における留学生の主観的評価は高く、授業内容は留学生においても有効に作用していたといえる。この結果は、留学生の客観的評価である確認テストの結果や日本語能力テストの結果とも整合しているといえる。

6. 考察

これまでに述べてきた結果・分析をもとに、以下にその要因を考察したい。

6.1 目標としていた能力が身についた要因

学生が授業で、目標としていた能力を身につけることができた要因として、まず授業における到達目標が明確で、学生が到達目標を正しく理解していたことが挙げられる。

次に、グループワークが上手く機能していたことが挙げられる。学生は、他の学生と意見交換することで刺激され、自身の思考を深めていたように見受けられた。

また、授業終了後に実施する確認テストの結果により、目標としていた能力の定着が明らかとなるわけだが、この、確認テストの実施こそが学生の能力定着に上手く作用していた。日本人学生、留学生インタビュー結果の「確認テストをするので、これまでより真剣に授業に取り組み学習するようになった」などにもあるように、確認テストの実施があるからこそ、学生はより高得点を狙って能動的に学修する様になり、その結果、目標としていた能力が身についたと考えられる。このように確認テストが有効に働いたということが実証できたということは、「教育の質の保証」を実証できたことに等しいといえる。

6. 2 留学生の日本語能力が伸びた要因

授業の事前事後に実施した日本語能力テストの結果から、留学生の日本語能力が伸びたことは明らかである。留学生の日本語能力が伸びた要因として、まず、授業中に母国語は話さずに日本語のみを使うこととし、グループワークをとおして日本人学生と日本語を使って交流できたことが挙げられる。そうすることによって留学生が得られた、日本人学生からの日本語文法のアドバイス（「その言い方はおかしい、こうすべき」など）が有効に作用していたと考えられる。

6. 3 今後の課題

科目別授業評価記述式アンケートの「改善した方がよいと思う点」にあった学生の意見である「教員間の引継ぎが上手くいっていないと感じることがあった」「後半の授業は時間が足りなかった」に耳を傾け、来年度以降の課題として、チームティーチングにおける教員間の引継ぎの徹底、プレゼンテーション資料作成時間の確保に伴う、授業時間の配分の見直しが挙げられる。

また、日本人学生、留学生インタビュー結果と、科目別授業評価アンケート結果で整合していなかった「学習時間の有無」について、来年度以降、質問文を変更するなどの見直しが求められる。

7. おわりに

以上により、当短大の初年次教育のアクティブラーニング授業の効果は主観的な面だけでなく、客観的な見地からも実証できた。このことは「教育の質の保証」を検証できたことにつながる。しかしながら、この結果は実践授業におけるひとつの結果に過ぎず、一般性までは示唆できていない。今後は、より多くのデータを収集することに努め、結果を一般化させたいと考えている。

引用・参考文献

- 中央教育審議会 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」 (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf). 2016.10.21取得
- 中央教育審議会 (2012) 『用語集』 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」 (答申) (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm). 2016.10.21取得
- 川島啓二 (2008) 「初年次教育の展開とGP事業」 『大学と学生 5月号』 第一法規出版pp.24-30
- 倉林眞砂斗 (2013) 「“グローバル・キャンパス” の役割と可能性」 『大学時報9月号』 日本私立大学連盟pp.64-69
- 杉谷祐美子 (2008) 「初年次教育の「今」を考える～2001年調査と2007年調査の比較を手がかりに～」 『大学教育学会第30回大会資料』 大学教育学会pp.5
- Charles C. Bonwell 他 (1991) 『Active Learning: Creating Excitement in the Classroom (J-B ASHE Higher Education Report Series (AEHE))』 ペーパーバック